

ところが近年の研究によりブナ原生林を広範囲に詳細に調べてみると、その中に老齢木が倒木した跡地等の高木層を欠く場所（これをギャップと呼び、一ヶ所の面積は数十～数百m²）がモザイク状に混在しており、その中で芽生えから生じた若木が成長していることが見出されました。つまり、この

ようなギャップの半日陰のような微妙な条件下において、ブナの天然更新が行われるという秘密のメカニズムが解明されたのです。ギャップによる更新の発見は、ブナ原生林が全くの自然状態において確実に持続していくことを科学的に証明したとも言えます。



ブナ巨木との語り

人と自然、特にブナ原生林とのかかわりあい、そしてそこから享受される様々な恵みを知り、ブナ原生林の存在が人間にとって必要なものであることを理解すれば、その適切な保護が誠意推進されるものと思います。

自然保護とは、一言でいえば、この地球上で人間が永続的

に生存するための自然の賢明かつ合理的な管理を考えられます。ブナ原生林について、私たちが将来にわたって健康かつ文化的で安全な生活のため必須の存在であるとの共通認識のもとで、その適切な保護による将来の県民への確実な継承を望みます。

（自然林のこども）

下田なんじゃもんじゃの木

長谷川 悌 二

嵐渓楽府 三千坊 天民作

庭前有樹名又奇
云没名樹葉以棕
皮以銀杏花細微
伝説移植天竺樹

下田村史に三千坊には佐渡まで聞えた名鐘があり、火災で鐘楼は焼け、鐘は池に沈み、池のほとりに大木があったが、だれもその名を知らなかったので、名無しの木と呼ばれた。この木にかすり傷でもつけると、赤い血のような樹脂が流れ、この木の枝根を持ち帰

っても、「三千坊へ行きたい、行きたい」と泣くため、持ち去る者もなかったが、乙宝寺と五十嵐神社に一本ずつ成木になっているという。木は檜に、葉は棕に似ているが、初夏に小さな白い花をつける。

三千坊開基以来天平の昔からなんじゃもんじゃの木だ。名無しの木だったが、別に奇樹でも、天竺の樹でも、血の流れる木でもなければ、初夏に花が咲くわけでもない。早春に花咲く春楡であろう。

ハルニレ、北の地方に多い落葉高木。高さ30m、直径1～2mに達する。若枝には軟毛が多く、二年枝は無毛。皮目は散生する。樹皮は灰褐色。縦に深い割れ目がある。葉は12cmくらいで、表面ざらつき、微毛があり、葉脈に沿って短毛がある。花は四月に葉に先だって咲き、両性。分布は温帯で北海道から九州まで、県内では散生している。同じ科にはエノキ、ケヤキなどがある。

（下田野草会）